

今や米英軍などの間には通り相場になつてゐる。米英空軍は日本の戦闘機を見るこ「地獄の使ひが來た」とばかり尻に帆をかけて逸早く逃げ去つて了ふといふ。斯ういふ無敵皇軍の乗る飛行機を我等の手で造るのだと思ふと、力も魂も、おのづと息數萬の大軍を引き連れアルプスの嶮險を越えるに成功した奈翁には、自分の辭書に不可能なる文字は載つて居ないと豪語したと云ふ。世に或はウタタローの悲劇やセント・ヘレナの配所の月を指して、此れ奈翁の「不可能」にあらずやと嗤ふ人もあらう。併し前人の未だ成し遂げなかつたアルプス越を成し遂げ得たことそれ自體は、正しく曾つて不可能と思はれて居たことが可能になつたことを立證するものにして、奈翁の不可能抹殺論も強ち英雄の人を齎す語とばかり受取れないと思ふ。世に絶對的不可能もあるかも知れないが、科學の發達は遂にある時代の不可能を、次の時代に於て可能なならしめる結果を齎らした。

結論として
は今すぐ何を爲すべきかに對する
この東亞戰爭は、航空決戦の一
點に集中して居り、必勝のためい
ま航空機は絶対に必要である。こ
の儀たる事實を國民の總てはハツ
人類文明史は、ある意味に於て不
可能征服史と見て差支ない。而し
てより多く不可能を征服し得る民
族乃至國家が、最後の勝利を得て不
榮えることも當然の歸結である。
誰か五年前に於て、今日の東亞の
地圖色の塗替を想像し得たものあ
らうぞ。また誰か今より五年後の
能より可能へ

不可能より可能へ

皇奉運動の一新兵として

皇奉本部動員部長

林茂

生

キリと認識した上で、その立場から職域において最善を盡して直捷接航空機増産と航空戦力増強に身すべきである。

といふに盡きるのでは無いかといふ。特に航空機に對する認識を要るといふことが根本であらう。

伏在して居ると説く人もあらう。筆者をして云はしむれば、かゝる不可能は要するに隘路である。隘路にも路はある。路は打開を要する。殊に事人心の機微に關する限り、隘路の打開には「誠」は絶対必要である。至誠神明に通すると云ふが、至誠始めて田夫野叟の心に溶けこむことが出来る。此の頃「手」と云ふ言葉をよく聞く。手は「用」にして誠は「體」であり、「手」は小乘にしで「誠」は大乗である。誠ありて始めて「手」は充分な動をなすことが出来る。而して誠は大抵愚の字を冠して居る。筆者は皇民奉公運動の一新兵として敢へて此の愚誠の二字を以て自から勉む。敷島の大和心を人問はばまことのほかになしと答へむ 杉浦重剛

尙飛行機に次いで船の必要なこと
も自明の理だが、造船の必要や海員
尊重の件については他の機會に譲る
ことにしたい。

最後に長谷川總督の所謂『沈まさ
る航空母艦臺灣』についても航空機
と結び付けて我々はもつとく掘り
下けて考へてみねばならぬ。今日の
航空決戦時代では航空基地を持つと
いふことが戦勝への絶対條件である
が、我が臺灣は舉けて絶好の一大航
空基地であり、つまり沈まない航空
母艦なのである。日本々士に續いて
南方に此の大航空基地臺灣があると
いふことは、南方共榮圏に大建設を
進めていく上にどの位大なる力であ
るか殆ど測り知られぬのである。言
ひ換へると日本と大東亞の南方圏と
を空中で結ぶのは實に此の我等の臺灣
なのである。私たちは、今日の航空
決戦時代や今後の航空第一の時代に
ついて十分に認識を深め、めいこ
の立場から航空機増産に何等かの形
で少しでも多くお役に立つやうに
工夫し、努力しなくてはならぬと思
ふ。